OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	就労している2型糖尿病患者のための生活時間のマネジメントを活用した看護介入方法の検討
Author(s)	中尾, 友美
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76473
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　中尾　友美　）	
論文題名	就労している2型糖尿病患者のための生活時間のマネジメントを活用した 看護介入方法の検討

論文内容の要旨

2型糖尿病の治療は生活習慣の調整が必要であることから、患者の自己管理に関する教育が重要である。特に、高齢者の割合が最も高くなる時期に高齢期を迎える現在の壮年期世代に対する対策が重要課題である。しかし、その世代の患者にとって自己管理の継続は困難を極め、仕事をしながら生活調整をする困難が、糖尿病の管理を妨げる要因になると言われている。そこで、就労している2型糖尿病患者の看護介入方法の検討について研究を進めた。

【研究１】就労している2型糖尿病患者が経験する困難と対処行動に関する研究

目的：就労している糖尿病患者について、どのようなことに困難を感じ、それらにどのように対処しているのか十分に明らかになっていない。そこで、研究1では、仕事とセルフケアを両立させるために患者が感じている困難と対処を明らかにし、患者の困難に対応した患者教育プログラムの方向性を明らかにすることを目的とした。

方法：研究デザインは、混合研究法で質問紙調査と面接調査を実施した。対象は、外来通院中の2型糖尿病患者とし、質問紙調査では、糖尿病の負担感情、HbA1cなどの検査データを調査した。質的調査は、質問紙の記入後に、困難の有無とそれに対する対処について話してもらった。データ分析は、質的データは類似性からカテゴリーを作成した。量的データは、記述統計で全体を把握すると共に、質的データで得られた仕事とセルフケアの両立で感じる困難毎に、対処行動の有無と関連する要因を検定した。

結果：対象者は100名（男性77名、女性23名）、平均年齢53.1±9.6歳であった。仕事と糖尿病管理の調整で感じる困難には、“生活時間の再調整が上手くいかない”、“療養生活を阻害するストレスの存在”、“人間関係の維持と療養行動の実施における葛藤”という3つの側面が明らかとなった。患者が実施している対処に関連する要因では“生活時間の再調整が上手くいかない”ことへの対処の有無とBMIにおいて有意な差があった。

結論：就労者には、ストレスや人間関係に加え、時間管理という点からの関わりも検討する必要があると考える。

【研究２】就労している2型糖尿病患者の生活時間のマネジメントスケールの作成

目的：研究1において、患者が感じている困難には心理的側面に加え、生活時間のマネジメントに関する側面があることが分かった。精神的支援については、職場での対策が進んでいるが、生活時間のマネジメントに関しては、有効な手立てが明らかにされていない。そこで、生活時間のマネジメントにどのような視点が含まれているのかを示し、その視点でアプローチをする必要があると考えた。したがって、研究2では、就労している2型糖尿病患者の生活時間のマネジメントを評価するスケールを作成し、信頼性と妥当性を確認することを目的とした。

方法：外来通院中の糖尿病患者277名を対象に自記式質問票による調査を実施し、220名を分析対象とした（平均年齢54.3± 10.2歳,男性76.8%）。質問項目の作成は探索的因子分析を行い、信頼性の確認はCronbachのα係数を算出した。妥当性は、糖尿病患者のセルフケア能力尺度（IDSCA）との相関を確認すると共に確認的因子分析を行った。

結果：“仕事の調整”、“時間のコントロール”、“価値観に合った目標設定と行動”、“生活リズムの調整”の4つの因子から成る16項目のスケールで妥当な適合度が確認できた。Cronbachのα係数は、尺度全体および各下位尺度で0.7以上であった。IDSCAの合計得点と各因子には、有意な相関があった（r＝.280～.469）が“生活リズムの調整”の

みIDSCAの下位尺度の一部と相関しなかった。また、作成したスケールの4つの因子全てにおいて、IDSCAの「自分らしく自己管理する力」との相関係数が最も高かった。

結論：信頼性と妥当性の確認ができ、就労している糖尿病患者の生活時間のマネジメントの評価のために本スケールは活用可能である。また就労している2型糖尿病患者の教育を行う際は、“仕事の調整”、“時間のコントロール”、“価値観に合った目標設定と行動”、“生活リズムの調整”といった4つの視点で患者を捉え、生活の調整方法を共に検討することが望ましいと考える。

【研究３】**就労している2型糖尿病患者の生活時間のマネジメントスケールを活用した個別面接の評価**

目的：作成したスケールを活用した看護介入方法を検討した後、その有効性を検証することを目的とした。

方法：看護介入方法は、スケールの質問項目を踏まえ研究者で検討をした。内容は、外来診察のタイミングを活用し、作成した生活時間のマネジメントスケールの4側面から、就労している2型糖尿病患者に個別面接を実施するものである。研究デザインは層別無作為化比較試験とした。介入効果は、HbA1c、BMI、生活時間のマネジメント、IDSCA、睡眠、ストレスを確認した。

結果：介入群14名、対照群15名を分析し、HbA1cは、ベースラインと介入後の差において、介入群が有意に低下していた（介入群：−0.1±0.7,対照群：0.4±1.3；p＝0.018,r＝0.44）。BMI、睡眠、ストレスについては、介入による差はなかった。IDSCAは、モニタリング力、自己管理の原動力、自分らしく自己管理する力において、ベースラインと介入後の差が対照群に比べ介入群が有意に上昇していた。生活時間のマネジメントは、価値観に合った目標設定と行動において、ベースラインと介入後の差が対照群に比べ介入群が有意に上昇していた。

結論：セルフケア能力やHbA1cの改善がみられたことから、就労している2型糖尿病患者にとって生活時間のマネジメントの視点からの介入は有効であると考えられ、臨床での活用を目指し実行可能性を高めるための検討が今後必要である。

【総括】

研究1、2を実施することで、就労している2型糖尿病患者において、生活時間のマネジメントという視点から関わるという方向性を示すと共に、“仕事の調整”、“時間のコントロール”、“価値観に合った目標設定と行動”、“生活リズムの調整”といった4つの側面から患者を捉えていくといった方向性を示すことができた。また、作成したスケールは、仕事をしながらその人らしく自己管理する力を意味すると考えられ、このスケールを活用することで、4つの因子の中でどこに困難や問題を抱えているのかを見出す視点となりうると考える。

介入研究の結果では、“価値観に合った目標設定と行動”に変化が生じ、HbA1cやセルフケア能力の改善がみられた。これは、血糖値を良くする為の自己管理目標を設定するだけではなく、生活や仕事を含め多方面から今後の人生について共に考えた結果であると考える。医療者は疾患を中心に患者の生活を捉えるため、血糖値に直結する食事や運動を重点的に捉えるが、就労している患者にとっては、仕事を中心に生活を組み立てている場合も多い。したがって、就労している糖尿病患者の支援をする際には、仕事の状況を含めて生活の話をよく聴き、セルフケアとの関連をアセスメントし、糖尿病をよくするためだけの目標ではなく、人生をいかにその人らしく歩んでいくかについて考慮した目標を設定するといった生活時間全体のマネジメントを行いながら、生活改善策を考えることが、患者が糖尿病と上手く付き合うための支援につながると考える。そのような看護実践をサポートするものとして、本調査で検討した看護介入方法が役立てられるのではないかと考える。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　中尾　友美　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　教授　清水　安子 副 査　教授　井上　智子 副 査　教授　梅下　浩司	

論文審査の結果の要旨

論文内容の要旨

2型糖尿病の治療は生活習慣の調整が必要であることから、患者の自己管理に関する教育が重要である。特に、高齢者の割合が最も高くなる時期に高齢期を迎える現在の壮年期世代に対する対策が重要課題である。しかし、その世代の患者にとって自己管理の継続は困難を極め、仕事をしながら生活調整をする困難が、糖尿病の管理を妨げる要因になると言われている。そこで、就労している2型糖尿病患者の看護介入方法の検討について研究を進めた。

【研究１】就労している2型糖尿病患者が経験する困難と対処行動に関する研究

目的：就労している糖尿病患者は、糖尿病管理に伴う困難を軽減するために、試行錯誤しながら独自の方略で対処している。しかし、患者がどのようなことに困難を感じ、それらにどのように対処しているのかについては十分に明らかになっていない。そこで、研究１では、仕事とセルフケアを両立させるために患者が感じている困難と対処を明らかにし、患者の困難に対応した患者教育プログラムの方向性を明らかにすることを目的とした。

方法：研究デザインは、混合研究法で質問紙調査と面接調査を実施した。対象は、外来通院中の2型糖尿病患者とし、質問紙調査では、糖尿病の負担感情、セルフケア行動、HbA1cなどの検査データを調査した。質的調査は、質問紙の記入後に、困難の有無とそれに対する対処について話してもらった。データ分析は、質的データは類似性からカテゴリーを作成した。量的データは、記述統計で全体を把握すると共に、質的データで得られた仕事とセルフケアの両立で感じる困難毎に、対処行動の有無と関連する要因を検定した。

結果：対象者は100名（男性77名、女性23名）、平均年齢53.1±9.6歳であった。仕事と糖尿病管理の調整で感じる困難には、“生活時間の再調整が上手くいかない”、“療養生活を阻害するストレスの存在”、“人間関係の維持と療養行動の実施における葛藤”という３つの側面が明らかとなった。患者が実施している対処に関連する要因では“生活時間の再調整が上手くいかない”ことへの対処の有無とBMIにおいて有意な差があった。

【研究２】就労している2型糖尿病患者の生活時間のマネジメントスケールの作成

目的：研究１において、患者が感じている困難には心理的側面に加え、生活時間のマネジメントに関する側面があることが分かった。精神的支援については、職場での対策が進んでいるが、生活時間のマネジメントに関しては、有効な手立てが明らかにされていない。そこで、生活時間のマネジメントにどのような視点が含まれているのかを示し、その視点でアプローチをする必要があると考えた。したがって、研究２では、就労している2型糖尿病患者の生活時間のマネジメントを評価するスケールを作成し、信頼性と妥当性を確認すると共に、作成したスケールの患者教育への活用性を検討することを目的とした。

方法：外来通院中の糖尿病患者277名を対象に自記式質問票による調査を実施し、220名を分析対象とした（平均年齢54.3± 10.2歳,男性76.8%）。質問項目の作成は探索的因子分析を行い、信頼性の確認はCronbachのα係数を算出し

た。妥当性は、糖尿病患者のセルフケア能力尺度（IDSCA）との相関を確認すると共に確認的因子分析を行った。

結果：“仕事の調整”、“時間のコントロール”、“価値観に合った目標設定と行動”、“生活リズムの調整”の4つの因子から成る16項目のスケールで妥当な適合度が確認できた。Cronbachのα係数は、尺度全体および各下位尺度で0.7以上であった。IDSCAの合計得点と各因子には、有意な相関があった（r＝.280～.469）。

結論：信頼性と妥当性の確認ができ、就労している糖尿病患者の生活時間のマネジメントの評価のために本スケールは活用可能である。また就労している2型糖尿病患者の教育を行う際は、“仕事の調整”、“時間のコントロール”、“価値観に合った目標設定と行動”、“生活リズムの調整”といった4つの視点で患者を捉え、生活の調整方法を共に検討することが望ましいと考える。

【研究３】就労している2型糖尿病患者の生活時間のマネジメントスケールを活用した個別面接の評価

目的：研究３では、作成したスケールを活用した看護介入方法を検討した後、その有効性を検証することを目的とした。

方法：看護介入方法は、スケールの質問項目を踏まえ研究者で検討をした。内容は、外来診察のタイミングを活用し、作成した生活時間のマネジメントスケールの４側面から、就労している2型糖尿病患者に個別面接を実施するものである。研究デザインは層別無作為化比較試験とした。介入効果は、HbA1c、BMI、生活時間のマネジメント、セルフケア能力、睡眠、ストレスを確認した。

結果：介入群14名、対照群15名を分析し、HbA1cは、ベースラインと介入後の差において、介入群が有意に低下していた（介入群：−0.1±0.7,対照群：0.4±1.3；p＝0.018,r＝0.44）。BMI、睡眠、ストレスについては、介入による差はなかった。糖尿病患者のセルフケア能力は、モニタリング力、自己管理の原動力、自分らしく自己管理する力において、ベースラインと介入後の差が対照群に比べ介入群が有意に上昇していた。生活時間のマネジメントは、価値観に合った目標設定と行動において、ベースラインと介入後の差が対照群に比べ介入群が有意に上昇していた。

結論：セルフケア能力やHbA1cの改善がみられたことから、就労している2型糖尿病患者にとって生活時間のマネジメントの視点からの介入は有効であると考えられ、臨床での活用を目指し実行可能性を高めるための検討が今後必要である。

【総括】

研究1、2を実施することで、就労している2型糖尿病患者に対する看護支援においては、生活時間のマネジメントという視点から関わるという方向性を示すと共に、“仕事の調整”、“時間のコントロール”、“価値観に合った目標設定と行動”、“生活リズムの調整”といった4つの側面から患者を捉え、関わっていくといった看護介入方法を示すことができた。また、このような看護介入を実施することで、“価値観に合った目標設定と行動”に変化が生じ、HbA1cやセルフケア能力の改善がみられた。医療者は疾患を中心に患者の生活を捉えるため、血糖値に直結する食事や運動を重点的に捉えるが、仕事の状況を含めた生活時間の調整という視点での支援の重要性とその有効性を示したものと言える。

糖尿病患者の自己管理支援方法についての研究は、国内外ともに多数あるが、生活時間のマネジメントという視点から介入方法を検討した研究は見当たらず、独創性、新規性の高い研究であり、博士（看護学）の授与に値すると評価する。